

体験活動を通じた「『生き抜く力』育成教育プログラム」開発に関する一考察

－「にいま塩から子育成事業」での実践をとおして－

住本 克彦¹⁾*・城井田 二郎²⁾・竹元 渉²⁾

1) 新見公立短期大学 2) 新見市教育委員会

(2018年11月21日受理)

文部科学省(2017)は、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」において、2030年以降の社会の変化を見据えた課題解決に向けた教育政策の基本的な方針を示している。そこでの目指すものとして「社会を生き抜く力の養成－多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力－」を育むこととしている。本稿では、新見市が主催する体験活動を中核に据え、たくましく生き抜く力を育成することを目的とする「にいま塩から子育成事業」の成果と課題から、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」(「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標)教育プログラム開発の方途を探る。

(キーワード) 体験活動、生き抜く力、「にいま塩から子育成事業」、レジリエンス(Resilience)、グリット(Grit)

I はじめに

文部科学省(2017)は、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」において、2030年以降の社会の変化を見据えた課題解決に向けた教育政策の基本的な方針を示している。その中で、「今後の教育政策に関する基本的な方針」として、第1に「夢と自信を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する」を挙げている。ここでは、「急激に変化する社会を『生き抜く力』が必要であるとし、「夢や目標を持って積極的に行動し、積極的に社会に参画していくための力を育成し、自信を持って可能性に挑戦することができるようにすることが重要である」としている。また、この度の「第3期教育振興基本計画」の考え方も、今までの理念を踏まえたものとしており、つまり「第2期教育振興基本計画」(2013年度～2017年度：現行基本計画)の中核となった「社会を生き抜く力の養成－多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力－」を育むことの重要性も明記しているのである。

本稿では、幼稚園から高校まで、「生きる力」の確実な育成をポイントとし、幼稚園から生涯にわたって育成(「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標)する方途を探る。なお、「生き抜く力」の定義については、2008年3月告示の学習指導要領においてまず、「生きる力」が使われ、「知・徳・体のバランスのとれた力」を「生きる力」とした(文部科学省、文部科学

白書、2010)。そして、「第2期教育振興基本計画」における「基本的方向性1:社会を生き抜く力の育成」で、「生きる力」と同義で使用している(文部科学省)。本稿においても、「生き抜く力」を「生きる力」と同義で使用する。

II 研究目的

新見市が主催・実施した、体験活動を中核に据え、たくましく生き抜く力を育成することを目的とする「にいま塩から子育成事業」の成果と課題の検討から、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」(「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標)教育プログラム開発の方途を探る。

III 「にいま塩から子育成事業」について

1 「体験活動」の教育的意義

文部科学省(2008)は、「体験活動とは、文字どおり、自分の身体をとおして実地に経験する活動のことであり、子ども達がいわば身体全体を対象に働きかけ、かかわっていく活動のことである。」とし、さらに「自然教室や臨海学校のように、それ自体、目標や指導計画、指導体制、全体の評価計画などを持つまとまりのある教育活動を意味するものである。」としており、本稿でもこれを「体験活動」の定義とする。また、「体験活動」は、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成

*連絡先：住本克彦 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

長の糧としての役割が期待されている。つまり、思考や実践の出発点あるいは基盤として、あるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくために体験が必要である。」とし、以下のような8点を「体験活動」の効果としている。

- 「(1) 現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上 (2) 問題発見や問題解決能力の育成 (3) 思考や理解の基盤づくり (4) 教科等の「知」の総合化と実践化 (5) 自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得 (6) 社会性や共に生きる力の育成 (7) 豊かな人間性や価値観の形成 (8) 基礎的な体力や心身の健康の保持増進」

このように、子ども達に「生き抜く力」を育むためには、自然や人に触れる実際の体験が必要であるということである。それをとおして子ども達は、自然や実際の社会の在り方を学んでいくのである。「体験」こそが、子ども達の心身の成長の礎となり、「生き抜く力」を育む土台となるのである。

2 「にいみ塩から子育成事業」について

この「にいみ塩から子育成事業」については、主催者が「にいみ塩から子育成プロジェクト実行委員会」で、共催者は「新見市」である。なお、新見市は、岡山県の北西部にあって中国山地を背に高梁川の上流に位置する。自然豊かで、川に溪流魚が生息し、冬は雪が積もり、スキーが楽しめる。南部にはカルスト地形による井倉洞、満奇洞などの鍾乳洞が有名で、千屋牛、白桃、ニューピオーネなどの農産物が名産品である。人口は3万人を切っており、いわゆる中山間地域である。主要産業としては、鉱工業(石灰石)、農林業などである。

本事業の目的としては、「新見市の自然を活かした豊かな体験活動をとおして、何事にも積極的に取り組み、たくましく生き抜くことができる『塩から子』の育成を図る。」ことである。市内小学4年生～中学3年生を対象とし、2017年度は【サマーバージョン】(2泊3日)と、【ウインターバージョン】(1日)の年間2回実施した。詳細については、図1、図2、表1を参照してほしい。

ここで言う「塩から子(しおからご)」というのは、新見で使われる方言で、元気で活発な子という意味であり、まさに「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」で言うところの、「夢や目標を持って積極的に行動し、積極的に社会に参画していくための力を育成し、自信を持って可能性に挑戦することができるようにする力」つまり「急激に変化する社会を『生き抜く力』」の基礎を、こういった体験活動をとおして培っていくことが重要である。この「にいみ塩から子育成事業」のねらいもそこにある。

また、「夢の教室」(夢を知り、語る体験)では、自分の夢の実現に向けて全身全霊で取り組んでおられるゲス

【にいみ塩から子育成事業「さあ冒険へ出発だ！」(1)】

【ねらい】新見で使われている方言「塩から子」とは元気で活発な子という意味。そんな子どもたちを新見で育てるプロジェクト「にいみ塩から子育成事業」の夏のキャンプを開催し、元気で活発、たくましく生き抜く子どもを育成する。

【日時】2017年8月10日(木)～12日(土)二泊三日

【場所】新見市青少年野外活動センター(まんさく公園)

【定員】92名(対象：市内小学4年生～中学3年生)

※応募多数の場合は抽選となります。

※全日程参加できる人に限ります。

【参加費】3,000円(当日現地で集めます・主に飲食費)

【内容】

- 一日目：《作る体験》：米粉ピザ・ヒノキのはし作り・カレー

◎「夢の教室」〈夢を知り、語る体験〉・テント泊

- 二日目：《林業コース》：木材のせり見学

《農業コース》：そばの種まき

《畜産コース》：牛のせわ

《鉱業コース》：石灰鉱山工場見学

※千屋牛井・アマゴの串焼き

※キャンプファイヤー・テント泊

- 三日目：《遊ぶ・食す》※カレー・そうめん

◎「夢の教室」〈夢を知り、語る体験〉

【申込先】「各学校」または「新見市教育委員会 学校教育課

【主催】にしみ塩から子育成プロジェクト実行委員会

【共催】新見市



図1 【「にいみ塩から子育成事業」サマーバージョン】

【にいま塩から子育て事業「さあ夢冒険へ出発だ！」(2)】

【ねらい】新見で使われる方言「塩から子」とは元気で活発な子という意味。そんな子どもたちを新見で育てるプロジェクト「にいま塩から子育て事業」の冬のキャンプを開催し、元気で活発、たくましく生き抜く子どもを育成する。

※新見市の自然（雪）を活かした豊かな「体験活動」をとおして、何事にも積極的に取り組み、たくましく生き抜くことができる「塩から子」の育成を図る。

【日時】2018年1月27日（土）

【場所】千屋温泉オートキャンプ場周辺

【定員】64名（対象：市内小学4年生～中学3年生）

【内容】

8:00 開校式（市役所庁舎）

9:00市役所南庁舎出発

10:00千屋温泉到着

10:30昼食づくり（豚汁・おにぎり）

12:30 活動（スノートレッキング・雪遊び等）

16:30 ◎「夢の教室」〈夢を知り、語る体験〉

18:00千屋温泉出発

19:00開校式（市役所南庁舎）

【申込先】「各学校」または

「新見市教育委員会 学校教育課」

【主催】にしみ塩から子育てプロジェクト実行委員会

【共催】新見市



図2 【「にいま塩から子育て事業」ウインターバージョン】

トティーチャーの話を、まず参加者全員で聞き、その後、参加者が、グループ毎に自分自身の将来の夢や希望を語り合う活動を設定した。ここでは、ボランティアで参加しているリーダー自身も、参加者と共に、互いの将来の夢を語り合う活動とした。

表1. 2017年度「にいま塩から子育て事業」参加者数（人）

事業	合計	小4	小5	小6	中1	中2	中3	実行委員	ボランティア
夏	92	50	21	14	7	0	0	31	60
冬	64	39	17	5	2	1	0	30	36

IV 参加者のアンケート結果からの考察

表2、表3のように、96.6%（夏）、100%（冬）の参加者が「楽しく参加」しており、「自主的に活動」ができた参加者が、94.2%（夏）、96.4%（冬）であった。「協働した活動」も、90.8%（夏）、100%（冬）の参加者ができたと答えた。

表2. 参加者アンケート
（「にいま塩から子育て事業」サマーバージョン）

アンケート項目	参加児童生徒全体			
	男子	44人		
	女子	43人		
	A	B	C	D
アンケート項目	とても思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
①参加して楽しかったですか	74	10	3	0
②自分から進んで活動できましたか。	37	45	5	0
③協力して活動できましたか。	58	21	6	1
④新しい友達ができましたか。	67	19	0	0
⑤新見市について体験・見学を通して知ることができましたか。	66	18	2	0
⑥また参加したいですか。	56	23	6	2
⑦将来も新見市に住みたいです。	40	29	12	6

表3. 参加者アンケート
（「にいま塩から子育て事業」ウインターバージョン）

アンケート項目	参加児童生徒全体			
	男子	22人		
	女子	34人		
	A	B	C	D
アンケート項目	とても思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
①参加して楽しかったですか	50	6	0	0
②自分から進んで活動できましたか。	32	22	2	0
③協力して活動できましたか。	49	7	0	0
④新しい友達ができましたか。	49	6	0	1
⑤新見市について体験・見学を通して知ることができましたか。	40	15	1	0
⑥また参加したいですか。	44	9	2	1
⑦将来も新見市に住みたいです。	32	17	5	2

「新見市についての新たな発見」ができた参加者は、96.6%（夏）、98.2%（冬）であった。参加者が「実感した新たな発見（自由記述）」としては、サマーバージョンでは、「新見は自然が豊か」、「桃の栽培・選果について知ることができた」、「石灰のでき方と石灰が新見に多いこと」、「千屋牛の飼育の仕方について知ることができた」、「草間（新見市草間地区）でそばをつくっていることを知ることができた」、「千屋牛など特産品の種類について知ることができた」、「新見市の人はみんなやさしいこと」、「新見の山には檜や杉が多い、間伐の大切さについて知ることができた」、「新見市の産業について知ることができた」などであった。ウインターバージョンでは、「新見は雪が多く雪でたくさん遊べること」、「新見の自然の豊かさ」、「雪を生かした活動の多さとおもしろさについて知ることができた（スノートレッキングなど）」、「新見市の人はみんなやさしいこと」などであった。

なお、それぞれ日数が違い、内容も異なるが、新見市の自然が豊かなところや、子ども達がかかわった地域の人々への印象として、人情味などに対する好印象も特筆できる。表4、表5のように、「協働する力」や「挑戦心」、「自主性」、「コミュニケーション力」、「がまん強さ」、「企画力」、「創造力」等を、参加者自身が、これらの活動を

表4. 参加者回答（1）

（「にいま塩から子育て事業」サマーバージョン）

○この3日間を通して、どんな力がついたか。
（複数回答可）

協力する力	44
行動力/勇気・積極性	18
調理力（料理をつくる力）	8
忍耐力	4
優しさ	4
考える力	2
その他	13

表5. 参加者回答（2）

（「にいま塩から子育て事業」ウインターバージョン）

○活動を通して、どんな力がついたか。
（複数回答可）

協力（助け合う）する力	24
行動力/勇気・積極性	10
コミュニケーション力	6
考える力	6
忍耐力	4
体力	4
その他	5

とおして身に付いたと答えている。

以上の結果から、「にいま塩から子育て事業」に参加した子ども達は、楽しく体験活動に参加する中で、「主体性」や「協働力」、「がまん強さ」、「挑戦心」等を高められたと実感すると共に、地域の特性や良さについても新たな発見をしている。この点では、地域への愛着心を育て、地方創生を活性化させる方途としても重要な事業でもあったと考えられる。

さらに、ボランティアスタッフに、地域の高等学校や大学の生徒・学生が参加し、彼らの「にいま塩から子育て事業」事前研修会では、ボランティアスタッフへは、趣旨説明と共に、参加者の主体性の重視であったり、ボランティアスタッフが参加者にすぐに手を資さないで、可能な限り「待つ」姿勢・「見守る」姿勢を持ったり、参加者の自尊感情の育成を中心に据えながら、いかに「生き抜く力」を育てるかを常に意識したかわりを求めるなどを徹底するようにした。

V 「生き抜く力」と「にいま塩から子育て事業」、関連領域（「レジリエンス」(Resilience)、「グリット」(Grit)）との比較

「生き抜く力」と「にいま塩から子育て事業」、関連領域（「レジリエンス」(Resilience)、「グリット」(Grit)）を比較したのが、表6である。

1 「生き抜く力」と「にいま塩から子育て事業」の関連

「生き抜く力」は、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力等を指す（中央教育審議会）。その育て方としては、「生活体験」や「自然体験」などの実際の体験活動の機会を広げていくことが望まれる（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第15期中央教育審議会）。

つまり、「にいま塩から子育て事業」との関連では、「生活体験」や「自然体験」などの「体験活動」を中心に、人とのかわりをおして、「自主性」、「協調性」、「責任感」、「挑戦心」、「感動心」、「コミュニケーション力」、「課題発見力」、「問題解決力」、「自己統制力」、「共感性」、「健康・体力」等を育てようとする点が重なっている（本項目の下線部分で、関連領域相互の共通点を表示）。

2 「レジリエンス」(Resilience) と「にいま塩から子育て事業」との関連

「レジリエンス」(Resilience) とは、①現実的な計画を立案実行できる力 ②自分を肯定的に捉え、自分の強みや

表6. 「生き抜く力」と「にいま塩から子育成事業」、関連領域（「レジリエンス」(Resilience)、「グリット」(Grit)）の比較

領域	「生き抜く力」	「レジリエンス」(Resilience)	「グリット」(Grit)	にいま塩から子育成事業
意義・目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力。 ・ 自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力 (中央教育審議会) 	<ul style="list-style-type: none"> ①現実的な計画を立案実行できる力 ②自分を肯定的に捉え、自分の強みや能力を信頼できる力 ③コミュニケーション力と問題解決力 ④強い感情や衝動をコントロールできる力 (小玉, 2014) 	<p>「やり抜く力」: 長期的なゴールを決めて、どんな手を使っても、どんなに努力してもそれが実現するまでは諦めないということが出来る人のこと。諦めるのが楽なときに、Gritを持っている人はやり抜くことができる。(Angela. D, 2016), ・Grit は「情熱」, 「粘り強さ」のこと (Angela. D, 2016)</p>	<p>新見市の自然を活かした豊かな「体験活動」をとおして、何事にも積極的に取り組み、たくましく生き抜くことができる「塩から子」の育成を図る。 (※小学4年生～中学3年生を対象とし、2017年度は【サマーバージョン】(2泊3日)と、【ウインターバージョン】(1日)の2回実施した)</p>
育て方等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活体験や自然体験などの実際の体験活動の機会を広げていくことが望まれる (21世紀を展望した我が国の教育の在り方について第15期中央教育審議会) ・ 学校が実施する宿泊体験活動の取組の充実 (文部科学省: 「第2期教育振興基本基本計画: 社会を生き抜く力の養成」2013)。 	<ul style="list-style-type: none"> ①冷静さ (感情のコントロール) ②柔軟性 (多様な思考) ③楽観性 (ポジティブ思考) ④自信力 (自己効力感) ⑤人間力 (人間関係力) ⑥回復力 (自ら癒す力) (小玉, 2014)。 ※グループワーク等 (自尊感情を育てることを目当てにした「レジリエンスを育てるワーク: 友だちほめて自分もうれしい」等) をとおして育成 (上島, 2016)。 	<ul style="list-style-type: none"> ①興味 (心から楽しむこと) ②練習 (慢心がないこと) ③目的 (社会に貢献すること) ④希望 (常に持ち続けるもの) (Angela. D, 2016) ※子どもたちを理解してあげること、子どもたちがモチベーションを高めながら学べる環境をつくってあげること (Angela. D, 2016)。 	<p>「体験活動」をとおした人や自然とのかかわりの中で育成する。自主性、協調性、責任感、挑戦心、感動心、コミュニケーション力、自主性、協調性、責任感、挑戦心、感動心、課題発見力、問題解決力、自己統制力、適応力、ポジティブ思考、自尊感情、人間関係力、回復力、公共心、健康・体力、共感性、企画力、実行力、根気強さ、夢・希望を持ち続ける心、逆境を乗り越える力、創造力 等</p>

能力を信頼できる力 ③コミュニケーション力と問題解決力 ④強い感情や衝動をコントロールできる力を指す (小玉, 2014) 。それを育てる場合、①冷静さ (感情のコントロール) ②柔軟性 (多様な思考) ③楽観性 (ポジティブ思考) ④自信力 (自己効力感) ⑤人間力 (人間関係力) ⑥回復力 (自ら癒す力) を、レジリエンスを高める6つのキーワードとしている (小玉, 2014) 。

つまり、「にいま塩から子育成事業」との関連では、体験活動をとおして、「企画力」、「実行力」、「自尊感情」、「コミュニケーション力」、「問題解決力」、「自己統制力」、「適応力」、「協調性」、「人間関係力」、「回復力」等を育成しようとする点が重なっている (本項目の下線部分で、関連領域相互の共通点を表示) 。

3 「グリット」(Grit) と「にいま塩から子育成事業」との関連

「グリット」(Grit) は、「やり抜く力」のことで、長期的なゴールを決めて、どんな手を使っても、どんなに努力してもそれが実現するまではあきらめないということが

できる人のことをいう。諦めるのが楽なときに、「グリット」(Grit) を持っている人はやり抜くことができるとされる (Angela.D, 2016) 。それを強くするステップとしては次の①～④が重視される。①興味 (心から楽しむこと) ②練習 (慢心しないこと) ③目的 (社会に貢献すること) ④希望 (常に持ち続けるもの) (Angela.D, 2016) 。

つまり、「にいま塩から子育成事業」との関連では、体験活動 (練習など) をとおして、「根気強さ」、「ポジティブ思考」、「公共心」、「夢・希望を持ち続ける心」等が重なっている。Angela.Dは、「グリット」(Grit) の要素として特に、「情熱」と「粘り強さ」を挙げており、これらは、「にいま塩から子育成事業」でねらいとする、「挑戦心」、「根気強さ」、「夢・希望を持ち続ける心」、「逆境を乗り越える力」とも符合している (本項目の下線部分で、関連領域相互の共通点を表示) 。

以上、「にいま塩から子育成事業」と「生き抜く力」、関連領域 [「レジリエンス」(Resilience), 「グリット」(Grit)] を比較したが、各領域において、「体験活動」を重視している点が共とおしており、「にいま塩から子育成事業」で

育てようとしている「塩から子」の資質が、他の関連領域における概念とも重なると言っても過言ではない。

また、高等教育の現況においても、専門知識の探究から知識基盤社会をたくましく生き抜いていくための汎用的技能（コミュニケーション能力・粘り強さ・自ら課題を発見し、解決を図る力、自ら目標を立て行動する力・変化や未知の問題への対応力・協調性・論理的思考力 など）の習得に焦点が移っており、これら、「レジリエンス」（Resilience）、「グリット」（Grit）も「生き抜く力」の重要な要素であり、今後、保育・教育で最重視していくべき、思考力を中核とし、基礎力と実践力を要素とした「21世紀型能力」（国立教育政策研究所、2013）が目指す「生きる力」とも重なるのである。

この点では、上島（2016）は、「困難を乗り越える心の力：レジリエンスを身につけよう」とおして、56のワークを紹介しており、「にいま塩から子育成事業」の中でもこうしたグループワーク等（自尊感情を育てることを目当てにした「レジリエンスを育てるワーク：友だちほめて自分もうれしい」等）導入も今後検討したい。

VI おわりに

以上のように、「生き抜く力」と「にいま塩から子育成事業」、関連領域（「レジリエンス」（Resilience）、「グリット」（Grit）を比較したが、各領域において、「体験活動」が重要視され、「にいま塩から子育成事業」で育成しようとしている「塩から子」の資質（自主性、協調性、責任感、挑戦心、感動心、コミュニケーション力、自主性、協調性、責任感、挑戦心、感動心、課題発見力、問題解決力、自己統制力、適応力、ポジティブ思考、自尊感情、人間関係力、回復力、公共心、健康・体力、共感性、企画力、実行力、根気強さ、夢・希望を持ち続ける心、逆境を乗り越える力、創造力等）が、他の関連領域においても、概念やその資質を育てる手立て等がほぼ共通していたと言える。

また、今後の課題としては、文部科学省（2008）も長期宿泊体験が有する意義として「(1)集団生活の中で協調性・自律性を育む」、「(2)『知』を総合化し、課題発見能力や問題解決能力を高める」、「(3)学びの意欲を促進する」、「(4)幅広い年齢層との多様な交流の機会を得る」を挙げており、可能なら長期の「体験活動」実施による「生き抜く力」育成を図っていくことが肝要である。

ここで今まで見てきた「にいま塩から子育成事業」実践の成果と課題を振り返ると、最も重要なのは「にいま塩から子育成事業」のスタッフ（指導者）のかかわり方がポイントとなる（この点では、「事前研修会」の持ち方やその内容がポイントとなる。）。河合（2007）も「体験活動を生かしていくには、子どもと関わる大人の存在が重要である。子ども一人ひとりを大事にし、孤立したり皆から嫌わ

れるようなこともする難しい子どもも取り込んで、皆が『一緒にやってよかったなあ』と思えるようにできる指導者が必要である。」（下線は筆者、以下同じ）としており、また、梶田（2018）も、「夢や志を実現していくためには、基礎となる知識や技能、思考力や表現力や問題解決力そして旺盛な知識関心と学習意欲が着実に身につけていかなければなりません。」とした上で、「これと同時に、子どもの精神的な成長にとって不可欠な体験的な基盤を豊かにしていくことも考えられなくてはなりません。」と「体験活動」の重要性を説いている。さらに、梶田は「『未来を生き抜く力』の育成とは、こうした基盤の上に立って、〈我々の世界〉を生きる力と〈我的世界〉を生きる力の双方を身につけさせることに他ありません。・・・〈我々の世界〉とは世の中であり世間です。・・・〈我的世界〉とは、その人自身が持つ独自固有の世界です。・・・ここでは『生き方の教育』が、そして『いのちの教育』が大きな課題になっていくこととなります。こうした基本的展望を持ちながら、子どもたちの『未来を生き抜く力』を育んでいく教育を、今後いっそう力を入れて進めていきたいものです。」としている。つまり、梶田は子ども達には、「我々の世界」を生きる力と共に、『我的世界』を生きる力も育てなければならないとしているのであるが（「〈我的世界〉を土台として〈我々の世界〉を生きる」〔梶田、2008〕）、〈我的世界〉を育てるのも、よき教育者でしかできない。」とも言い切っている。いずれにしても、体験活動におけるスタッフ（指導者）のあり方や子どもへのかかわり方が大切なのである（「にいま塩から子育成事業」では、「夢の教室」〈夢を知り、語る体験〉の場面で、スタッフ（指導者）が子ども達にどう寄り添うかが重要である。）。

ボランティアも含め、子ども達への「急激に変化する社会を『生き抜く力』や、「レジリエンス」Resilience）、「グリット」（Grit）の育成も踏まえ、スタッフ（指導者）自身が「にいま塩から子育成事業」の目的意識をしっかりと持ちながら、「生き抜く力」育成に取り組む、スタッフ（指導者）の持つべき資質・要素を5点挙げ、結びとしたい。

(1) 「体験活動」の重要性はもちろん、事業に対する、責任感や探究力、事業全体を通じて自ら学び続ける力を持った人物。すなわち、「学び続ける者こそ、教える資格を持つ」をしっかりと認識した人物のことである。

(2) 「体験活動」についての専門的知識や技能を持った人物。すなわち、「体験活動」をとおして子ども達の育てるべき資質や手立てを明確に把握できている人物のことである。

(3) 豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、チーム対応力、地域社会と連携・協働できる力等、総合的人間力を持った人物。特にこれらの総合的な「人間力」については、急激に変化する社会において一層求められるであ

ろう。

(4) 専門知識の探究から知識基盤社会をたくましく生き抜いていくための汎用的技能の中核にあるものとしての、「自尊感情」を常に実感できる人物。この自尊感情の育成については、①自己効力感 ②自己有能感 ③自己有用感以上3つをその要素としており、「生き抜く力」や「レジリエンス」等の重要な構成要素でもある(表7参照)。

(5) 最後に、(1)～(4)の資質を備えて実践することが取りも直さず、子ども達に「生き抜く力」のモデルを示すことになっていることを認識した人物であること。

社会の現況をみると、グローバル化や情報化など、今後さらに進むであろう急激な変化に伴い、高度化し、複雑化する諸課題へ立ち向かう「生き抜く力」の育成が一層必要となってきており、「にいみ塩から子育成事業」のような、「体験活動」を中心に据えた実践が益々望まれる。21世紀を生き抜くための力を育成するため、これからの「にいみ塩から子育成事業」は、生き抜くための基礎的な知識や技能の習得に加えて、思考力や判断力、表現力等の育成や、人間関係を構築し、それを維持していく力等をさらに重視していく必要がある。

今後は、このような「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」を常に意識した、「体験活動」の展開と、子ども達の新たな学びを支えるスタッフ(指導者)の養成が強く求められていくことであろう。スタッフ(指導者)を

支える立場の主催者側も、こういった点を見据えた心構えをしっかりと持ち、スタッフ(指導者)自身が、指導力・専門性をより一層高め、子ども達に「生き抜く力」を育むためにも、「体験活動」の一層の充実を図ることが重要である。

謝辞

本稿執筆にあたり、御協力頂いた「にいみ塩から子育成事業」に参加された児童生徒の皆さん、保護者の方々、学校関係の皆様、その他、本事業推進に御協力頂いた関係の皆様方に衷心より御礼を申し上げます。

なお、前新見市教育長の中田省吾先生には、「にいみ塩から子育成事業」で育てようとしている「塩から子」の資質等について、貴重なご示唆を頂戴し、末筆ながら心より御礼を申し上げます。

文献

- ・アンジェラ・ダックワース著、神崎朗子訳：「GRIT『やり抜く力』」ダイヤモンド社2016.
- ・蝦名玲子：「『生き抜く力』の育て方」大修館書店2016.
- ・梶田叡一：「自己を生きるという意識」金子書房2008.
- ・梶田叡一：「〈いのち〉の教育のために」金子書房2018.
- ・小玉正博：「レジリエンス思考」河出書房新書2014.
- ・国立教育政策研究所：「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する顔や能力を育成する教育課程編成の基本原則」pp26-30 2013.
- ・河合隼雄：「〈つながり〉を実感できる体験活動を」兵庫県教育委員会心の教育総合センター：『命の大切さを実感させる教育プログラム』2007.
- ・河合隼雄・小川洋子：「生きるとは自分の物語をつくること」新潮社2011.
- ・文部科学省：「第2期教育振興基本基本計画」2013.
- ・文部科学省：「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」2017.
- ・文部科学省：「体験活動事例集－体験のスプーマー（平成17、18年度豊かな体験活動推進事業）2008.
- ・住本克彦：「『保育原理』『教育原理』で、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」をどう教えるか－「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」を本視座にして－」新見公立大学研究紀要第38巻第2号2018.
- ・住本克彦：「高陽中ブロック授業研究『自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る効果的取組－児童・生徒に「役割」「期待」「承認」を－」友野印刷(株)2015.
- ・鈴木威：「子どもの『生き抜く力』の高め方」東邦出版2016.

表7. 自尊感情の要素とその育成

	自己効力感	自己有能感	自己有用感
定義	◎自分はその行いをやり遂げることができるという感覚。 ◎未来指向性。明日を信じる力。 ◎自分を信じる力。 ◎夢。目標。	◎自分ではできるという感覚。 ◎自己への信頼性。 ◎自信と充実感。	◎他者・社会に対して役立つことがあるという感覚。 ◎他者との関係性。 ◎集団への貢献(役に立つ)。
子どもの意識	○「できそうだ！」 ○「やればできる」	○「がんばってよかった！」 ○「〇〇ができるんだ！」	○「このクラスの一員でよかった！」 ○「皆の役に立ててよかった！」
「体験活動」等、教育実践の場での視点	〈期待〉 ●他者も自分も励ます。 ●やる気・意欲を高める期待。	〈承認〉 ●ふり返る。自己評価。他者評価。認められる喜び。	〈役割〉 ●自分で決めた役割を担う。 ●自己決定(自己責任を伴う)。

(住本, 2015)

- ・徳永豊：「子どもの育ちと環境, レジリエンス」『教育と医学』vol.773 pp4-10慶応義塾大学出版会2017, 11
- ・中央教育審議会答申：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へー, 9, 2014.
- ・中央教育審議会答申：21世紀を展望した我が国の教育の在り方について, 7, 1996.
- ・上島博：「イラスト版子どものレジリエンス」合同出版2016.